小さな村を支えたじゃばらの軌跡と新たな挑戦

四方を山と他県に囲まれた日本で唯一の飛び地の村・北山村。人口430人ほどの小さなその村には、日本中から注目を集める果実がある。それは世界でたった1本だけ北山村に自生していた幻の香酸柑橘〝じゃばら〟だ。〝邪気を払う〟から〝じゃばら〟と呼ばれたその柑橘は大事に育てられ、今では8千本ほどが栽培されている。その収穫と加工品の販売が村の基幹事業のひとつだが、当初から順調だった訳ではない。

1985年に村営の加工場を作り商品の販売を始めるが売れず、赤字は増えるばかり。平成の大合併の前には、事業の撤退も検討されていた。そこで2001年、起死回生の策としてECサイトへ出店。モニター調査のキャンペーンを実施し、それがテレビで取り上げられた。「山奥の小さな村がインターネット上で特産物を販売することが珍しかった時代でしたから。それよりも注目されたのはアンケート結果。1000名にモニター調査をし、約47%の人々が花粉症などのアレルギーに効果があったというもので、それが大きな反響を呼びました」と語るのは、当時じゃばらを担当し、ECサイトへの出店に取り組んだ役場職員の池上輝幸さん。その後、健康ブームに乗り年間売上が大幅に増加したが、紀伊半島大水害の影響により売上は減少した。しかしそれで終わらないのが〝北山村〟。「HPやパッケージのリニューアル、メディアへの働きかけなど様々な対策を行いましたが、最も重要なのは、スタッフと目標を共有することでした。彼らの〝頑張り〟なくして、V字回復はなかったと思います」と池上さん。売上は現在、過去最高を更新しているが、北山村の〝じゃばら〟はさらに新しいステージに進もうとしている。今年4月には、池上さんが役場職員から転身して代表を務める100%村出資の〝株式会社じゃばらいず北山〟が本格始動する。それはもう小さな村の単なる農業ではない。明確な目標を掲げ、それに向かいワンチームで挑戦する〝北山村サクセスストーリー〟だ。

❶三重県と奈良県に囲まれ、和歌山県の他の市町村に接していない全国唯一の飛び地の村。国道沿いの北山川は、両端がダムに挟まれているダム湖でもある。湛えられた水は閑かで美しく、この下流で行われる観光筏下りは、日本では北山村でしか体験できず、年間8千人が訪れる人気の観光プログラム。❷じゃばらが整然と植えられている村営の相須（あいす）農場。村内の全作付面積は8haで、収穫量は村が管理する農園で60トン、一般の農家が40トン、合わせて100トンになる。❸「除草剤を撒かないので、収穫よりも胸まで伸びた夏場の雑草刈りが大変です」と語る宇城公揮（うしろこうき）さんは、農園の管理者となって10年経つ。じゃばら産業や観光、ライフラインの管理を請け負う100%村出資の北山振興株式会社の社員で、5月からは筏師としても活躍する。

もう1人の✻達人

じゃばらの売上が向上することで村の収益は増え、村民へのサービスも手厚くなり、若者の定住にもつながった。現在は18歳までの医療費など子育て関連費用が無料になり、中学校では海外への修学旅行と米国への語学研修が2年ごとに行われる。山奥の村だが、村の保育所もほぼ満員だという。新会社の売上目標は加工品で5億円。「村の収益を支える会社を、自分たちが支えるというプライドと責任をしっかりと感じています」と池上さん。

株式会社じゃばらいず北山　（4月1日より始動）
住所／東牟婁郡北山村下尾井335
電話／0120-928-933

じゃばらに含まれるナリルチンは、カボスの約13倍！

じゃばらに多く含まれるフラボノイドの一種。フラボノイドとは、抗酸化作用を持つポリフェノールの一つで、じゃばらでは青い皮に多く含まれる。じゃばら NRT-32は、果皮エキスに蜂蜜と濃縮果汁を加えた栄養補助食品で、北山村一番のおすすめ。